

## 和宮も休息した芦田宿本陣の作業に参加して

船田 一恵

2015年7月10日-12日、長野県佐久地域、芦田宿の本陣の壁と襖の裏張り解体作業に参加しました。

子どもの頃から何度も来たことのある佐久でしたが、芦田宿を知ったのは今回が初めてでした。16世紀末に宿場が開かれ、1800年に大改築を行った本陣は、壁や襖の裏張りとして不用な帳面を使いました。その帳面を1枚1枚剥がし繋げることで、元の帳面を復元できる可能性も秘めたものでした。

初日の午後、所有者の土屋さんをはじめ、町の歴史に詳しいすずらん会の皆さんや職員の方々に挨拶し早速作業を始めました。じゃんぴんのメンバーは西村代表、武子事務局長を含め8名、町の皆様も手伝いいただきました。メンバーは手慣れた方ばかりで、現場打ち合わせをしながら作業はどんどん進められました。史料の付番、スケッチ、状況の写真撮影、と元の下張りの位置にいつでも復元できるよう記録を丁寧にとりながら進めます。大勢で手分けし集中して行うので驚くほどスピードが早く感じました。史料番号は一番上に貼られた紙から順に付け、つまり、貼った時と逆の順番に剥がしていきます。初めての私は、付番された和紙に水（エタノール入）をスプレーしながら、200年前に糊付けされた紙を丁寧に1枚1枚剥がし、板や白紙の上に広げて乾燥させるまでを担当しました。虫損もなくきれいな紙でしたが、一部に壁土が付着していましたので、流水で紙から浮かし剥がしました。現物に触れながら、当時、紙張りをされた方は、まさか200年を経て剥がされてしまうとは夢にも思わなかっただろう、どのような方がこれを貼ったのであろうか、素人なのか表具店の職人なのか、いろいろ想像していました。年月を経ても隙間などはどこにもなく、ランダムに何層に重ねた部分でもどこが最上部なのかも分からない程でこぼこなく重ねられ、綺麗な仕事をされて

いることに妙に感動しました。同時に、今、私達のやっていることを200年後の人に見てもらえるものを残せるのか、日々流されているだけの我が身に疑問を感じてしまいました。

作業の途中、ご当主の案内で本陣の見学ができ、より史料が身近なものに感じられました。また、参加したメンバーには江戸時代の造詣が深い方が多く、思わぬ解説を多々いただけたのもラッキーでした。本陣は、中山道の中でも古い芦田宿の中央にあり、門と立派な玄関をくぐると、いきなり27畳の大広間が広がります。奥には鴨居に御簾を掛ける菊の金具が付けられた寝所や厠などもあり、高貴な方の宿であったことがわかります。加賀前田藩をはじめ30にもものぼる大名の参勤交代がある中で、最高位の宿泊客は1862年に江戸へ降嫁した皇女和宮、3万人の大規模な行列だったそうです。中山道は名所旧跡も多く縁起の良い地名もあることや長期の川の通行止めもなく女性に人気があった街道だったようで、この景色をどのような気持でご覧になられたのでしょうか？

土壁の中の裏張り。一何層にも重ねられ、土が付着している。

1層ごとにはがし、土を洗い流した。番号は1枚ごとに付ける。



エタノールと水を7:3で割ったものを霧吹きで吹きかけながら刷毛で伸ばし、一枚ごとにはがしていく。





2015年6月20日(土)、総会に引き続いて行われた東洋美術学校伊藤久実先生による第15回例会「装飾写本 Book of Hours について—祈りの本とその挿入画の紹介—」に参加いたしました。

今回のお話で中心となった「時禱書」とは、聖書を個人で持つ習慣がまだない中世ヨーロッパで唯一個人が所有していた書物で、王侯貴族から商人(平民)まで幅広い身分の人々が所有し、その中身には聖職者ではない俗人の祈禱文や一日の聖務が時間単位で記されています。15世紀に注文数や挿絵の彩飾技術がともに最盛期を迎えた時禱書ではありましたが、その後の宗教改革における聖書への回帰の影響から徐々に制作されなくなっていきました。

しかし、唯一個人で所有できた書物という性格から、貴族などが所有したものの中には豪華な彩飾が施された時禱書も多く(例:『ペリー公のいと豪華なる時禱書』など)、それらは現代においても美術品として大切にコレクションされています。最盛期の15世紀から数えても500年以上にわたって人から人へと時禱書が継承されてきたという事実こそ注目すべき点だと私は思いました。これらの中には、商業的な理由から美しく彩飾が施されたページだけを切り取ったもの(零葉)が取引されている姿を古書店やオークションサイト等で現在でも目にすることができますが、これらはもはや書物としての時禱書でも何でもなく、美しい彩飾が施された羊皮紙零葉でしかありません。書物としての機能(=手に取って読むこと)を保持したまま、人から人へと継承していくためには、時の所蔵者による所蔵者として負うべき責任や覚悟によって恒常的にメンテナンスが行われたことで、現在でもほとんど変わらぬ美しい姿を見ることができるのです。

時禱書のような稀覯書が目かけられて大切にされることは、ある意味当然かもしれませんが、指定文化財にはならないけれど、家あるいは地域にとっては唯一無二の存在である資料についても時の所蔵者(管理者)に求められる役割は同じなのではないかと思えます。また、そのような中で行われる修復に関しても、何がオリジナリティなのかを認識することで、継承してきた姿(見た目だけでなく、手触りも含めて)を可能な限り遺していく方法が選択されるべきであると、資料保存に携わる者として改めて強く思いました。



2015年8月1日(土)午後4時から学習院大学で開催された第16回例会に参加しました。「伝統建築の設計事務所がやっていること」というタイトルのもと、有限会社伊藤平左工門建築事務所の建築士・井上智氏から、鎌倉市円覚寺の申請業務のこと、川崎市日本民家園内の旧三澤家住宅や北村西望氏旧アトリエの耐震補強業務の様子、千葉県匝瑳市の飯高神社保存修理業務の顛末など、現場担当ならではの具体的事例を丁寧にお話いただきました。報告冒頭には、歴代伊藤平左衛門の事績紹介や文化財関連法令の説明もありました。

対象建造物が文化財指定を受けているか否か、将来の指定も見据え、調査に基づき予算内で適正な案を準備する。修復案が適切か(間違いではないこと)を、根拠となる文書や絵図類を示す。現存すれば古代から平成までのあらゆる絵図や写真等が役立てられる様子。建物の建替・復元のための調査や補強工事の際の苦労を言葉の端々ににじませつつ、さらりと語る。飯高神社の白黒古写真1枚から、堂舎周囲が現在より明るいので、昔は木立の手入れが適切だったことを読み取る眼。「(控柱に支えられる)こんな建物と出会うと、可哀想、何とかしてあげたいと思う」という熱意に参加者も共鳴、報告後の意見交換もたいへん活発でした。

約20年前、重文建造物の修理報告書を初めて手にした時、収録する寺史記述の充実ぶりに驚かされました。当日回覧された報告書を拝見し、伝統建築と向き合う都度、歴史資料に基づく調査要求があり、公刊の有無は不問で常に綿密な報告書が成ることも知りました。本報告を聞いて、建造物の過去の来歴情報や定期修復への備えに加え、周辺景観とセットで伽藍を存続するために今後必要となる将来視点も意識するようになりました。寺社のアーカイブズ資料は、求めに応じて即現用復帰することも実感した手応えある例会でした。



2015年6月17日、茨城大学水戸キャンパスにて、西村慎太郎氏による「石岡一色家文書の世界——茨城史料ネットレスキュー活動の紹介」と題する報告が、行われた。

「石岡一色家文書」は、東日本大震災後、茨城県石岡市の一色家の当主からのご依頼で茨城史料ネットがレスキューにあたってきた文書群である。2013年度以来整理活動を行ってきたが、この度無事終了し、文書群全体を茨城大学付属図書館に寄贈していただくこととなった。本報告は、それを記念して、行われたものである。

西村氏の報告は、「石岡一色家文書」の内容について、まず「家」「店方」「町会議員」「富士色醤油」といった、4つの大項目に分類してその全体像を示し、つづいて、具体的な資料に基づきつつ、一色家のタバコ小売業や売薬請負業、酒・醤油の醸造の経営などの様相と、近世土浦の有力商人川田庄三郎やコニカミノルタを設立する杉浦家との関係などを、丁寧に明らかにしていくものであった。

当日は、現在の一色家当主の一色誠一郎氏もお越しくださり、西村氏の報告を聴いていただくことができたが、報告を通して初めて知ったことも多かった、とおっしゃっていたのが印象的であった。質疑応答を終えた後、茨城史料ネット代表の高橋修から、

史料全体の目録が一色氏に贈呈された。史料の委託以来の作業が区切りを迎えた瞬間であり、地域に根差した資料保全活動をまたひとつ形にすることができた瞬間であった。

私事になるが、昨年4月に茨城大学に赴任し、引っ張られるまま茨城史料ネットのメンバーに加わり、右も左もわからないまま、時間と体のあくかぎり参加してきた。私と史料ネットとの関係は、ありてい言えばそのようなものだ。そうした新参者として今回の区切りに立ち会った感慨を述べるとするならば、史料ネットの活動は、それ自体が歴史叙述なのだ、といったところだろうか。

整理作業とそのなかでの発見、比較・分析や意見の交流。これらの活動を通して、ひとつの文書群から、地域の人びとの歴史像を立ち上げていく。一色家の史料群は歴史教科書に載るような派手なものではないが、そこには人びとが時代と向き合い、試行錯誤しながら生き抜いたことがたしかに示されていた。そうした、人々の“生きられた歴史”を地道に掘り起こし、所有者を含む地域の人びとと共有していくこと。論文執筆や大学の講義とは異なるけれども、こうした一連の流れもまた、立派な歴史叙述なのだと思う。今回の報告会を通して、史料ネットの活動の魅力を改めて感じることもできた。

## 活動報告

- 7月10日 『じゃんびん』 vol.19刊行
- 7月10～12日 立科町土屋家文書調査・保存活動
- 8月1日 第16回例会開催
- 8月8日 鶴のくらし博物館蔵戦争関係資料保存・調査活動
- 9月5日 調布市佐橋家文書調査・保存活動
- 9月6日 福島県双葉町の帰還困難区域から救出した古文書の整理作業協力
- 9月16日 国文研フォーラム報告  
「東日本大震災で被災した医学書と近世在村医」(西村慎太郎)
- 9月18～20日 南伊豆町伊浜肥田家文書調査・保存活動
- 9月31日～10月1日 常総市公文書レスキュー作業協力
- 10月7日 常総市公文書レスキュー作業協力
- 10月10日 東洋美術学校講義
- 11月14～16日 立科町土屋家文書調査・保存活動
- 11月14～16日 立科町清水家文書調査・保存活動

- 11月14日～12月6日 茨城大学図書館企画展  
『東日本大震災と文化遺産—学生と市民が守ったふるさとの記憶—』後援
- 11月26日 北海道立文書館文書等保存利用機関・団体等職員研修会講演  
「民間資料の把握・保存・利用—その意義と実践」(西村慎太郎)
- 11月28日 第8回南伊豆を知ろう会開催
- 11月28日 報告書『南伊豆を知ろう会』vol.2刊行
- 11月29～30日 南伊豆町伊浜肥田家文書調査・保存活動
- 12月10日 東洋美術学校講義
- 12月12日 福島県双葉町の帰還困難区域から救出した古文書の整理作業協力
- 12月14日 常総市公文書レスキュー作業協力

その他、茨城史料ネットの活動に協力  
東洋美術学校での文書修復作業(茨城史料ネット・肥田家)

※前号で千葉県野田市小林家文書保存・調査活動と千葉県流山市岡田家文書保存・調査活動の日付が間違っておりました。正しくは6月6日です。訂正してお詫び申し上げます。



## 埼玉県加須市加藤家文書所在確認調査について

西村 慎太郎

2015年6月27日、埼玉県加須市加藤家文書の所在確認調査を実施致しました。同家は戦国大名・小田原北条家の遺臣という由緒を有しており、近世騎西地域の豪農です。一部の古文書は『騎西町史』にも掲載されており、今回撮影した写真データなどについてはご所蔵者・関係者と相談の上、地元自治体への提供を準備しております。当日は今後の保存方法などについてもご相談させて頂き、また後日数点の由緒書を翻刻し、ご所蔵者・関係者にお渡し致しました。なお、翻刻は西口正隆氏が行い、西村が校訂を行ないました。

## 千葉県野田市小林家文書所在確認調査について

武子 裕美・西村 慎太郎

2015年6月6日(土)千葉県野田市にある小林家が所蔵する古文書について問い合わせがあったことを受けて所在確認を行った。小林家には庭にある稲荷社内に古文書が残されているほか、天保期の「御理解願書」と題された縦帳が残されている。

小林家文書に遺された紙の歴史資料の内、3点は京都伏見社より稲荷大明神を勧請した際の文書であり、1は「正一位稲荷大明神安鎮之事」、2は勧請のための御幣料の金200疋領収書、3は「御安鎮幣料定式」と記された幣料料金一覧の木版刷り、宿泊所日光屋(池田屋事件が勃発した旅館・池田屋の向かい)の京都観光木版絵図である。

このうち1は、嘉永2年(1849)7月豊日の「正一位稲荷大明神安鎮之事」であるが、これは伏見社の社家である荷田(羽倉)信度から戸辺作右衛門に宛てた稲荷社勧請許状である。本文は「右雖為本宮之奥秘、依各別之願望、略式修封之嚴璽令授与焉、祭祀慎之、莫怠也」と記されている。この許状によって屋敷内に稲荷社を勧請することができた。なお、羽倉信度は天保12年(1841)に宮中の非蔵人として出仕し、仁孝天皇・孝明天皇の雑務を取り扱っていた。明治2年(1869)には新政府の御殿掛に登用されている。歴史研究者の羽倉敬尚の外祖父に当たり、敬尚が信度のあとの羽倉家を相続した。

また、「御理解願書」は下総国葛飾郡金杉村百姓が小作地や木材の伐採における訴訟について、数点が写されているものである。天保7年(1836)10月の年記があり、当時の村の様子が垣間見えるものである。

## 報告書「南伊豆を知ろう会Vol.2」刊行

田中潤「石室権現と伊豆山修験」

岡村龍男「南伊豆の村々が支えた東海交通  
—蒲原宿助郷指名の背景—」

西村慎太郎「近世・近代伊豆の石材生産と流通」



2015年11月28日刊行

価格：500円

※印刷費を除いた金額は  
NPO法人歴史資料継承機構  
への寄付となります



↑「正一位稲荷大明神安鎮之事」

一勧進の為の金200疋領収書

NPO法人 歴史資料継承機構  
News Letter  
じゃんびん Vol.20

### ●発行●

〒198-0063  
東京都青梅市梅郷3-863-2西村方  
NPO法人歴史資料継承機構  
E-mail:info@rekishishiryō.com  
URL:http://rekishishiryō.com/

### ●発行者●

NPO法人歴史資料継承機構  
代表理事 西村慎太郎

編集:武子裕美  
イラスト:朝倉麻子

